

伝えたい

戦後79年 過去から未来へ

伝えたい記憶と言葉

河西允人さん 93

茅野市宮川

わたし達の少年期は「欲しがりませんー勝つまでは」という厳しい生活の毎日。口では言い表せない辛さや我慢の連続の時代



河西允人さん

でした。

生活は厳しく制限され、

学校では「欲しがりません勝つまでは」と言い、毎日の家庭生活では人頭割といえ生活必需品は手拭いは

思い出す 少年期

配給があり、学校では持参の弁当は昼食時に検査されました。

家庭では鍋釜衣服は修理やツギを当てる時代。学校では手帳や鉛筆は終わったり使用不能になるまで使って、短くなつた鉛筆を先生に見せて許可証を持つて新しく買わなければなら

ないといった具合。入試に合格して通う中学は授業料一ヶ月4円50銭を納入。しかし勉強は殆どなく、勤労奉仕や学徒動員で軍需工場で油だらけになつて働く学年も。学校に居る時は松本50連隊から配属された兵隊さんによる軍事教

2点、足袋は3点など、すべて衣料切符制。食糧は米は少なく代用食、例えば12戸の隣組に塩マス2匹の

練があつた。外国語の使用は全面禁止、カバンはランドセルに似た背囊、足は靴、脚絆を必ず巻く、学生校章入りの学生帽の身支度。よく働かねばならない時代、

勉強は二の次だった。家にあつては、夜は電球の下だけ照らすように工夫するなど、電気の光が外に一切漏れぬようにする。工場の煙突は黒く塗つたり縞

模様にして工場の存在を外から判らぬようにする。当時の生活や行いを考えると、今の生活は夢のようだし想像する天国だ。今後は永遠に昭和拾年代から昭和

和の終戦まで続いた地獄のような生活はあつてはならない。現在の生活が続くことを願うのみです。
※お寄せいただいた原文を尊重して掲載しました。